ロゴスとミュートス（6）

——大澤真幸氏インタビュー：詩的な深さと思弁的な明晰さ——

今号では、理論的研究から社会批評に至るまで、アカデミズムの内外に影響を与え続けている大澤真幸氏へのインタビューを掲載する。

社会学は社会に生きる人が直面するアクチュアルな問題を分析し、表現し、発信する。社会学者は言葉を用いながら、その言葉をなくしては表現できないような世界の広がりを伝えなければならない。それでは、文学的・詩的であるとされる一方、思弁的であると受け取られることもある大澤氏の文章が社会学者にとどまらず多くの人びとを魅了し続けているのは一体なぜなのだろうか。その答えを知る手がかりは、身体という根源的なテーマを起点に出発した大澤氏の理論的探究にある。社会や世界の成り立ちを根本から考え直したとき、私たちは今直面している問題の普遍性に気づかされるのである。

今号のインタビューを読めば、詩的な直感を手放さず、思弁的な明晰さをもって世界の広がりを深く表現する手がかりを知ることができるだろう。

社会学を学ぶきっかけ——恩師との出会い

——まずは大学進学以前、進学以降の学問的関心についてお伺いできればと思います。

大澤　社会学という学問をやろうと明確に思うようになったのは大学に入ってからですけれども、僕は長野県の松本深志高校という地方都市の高校出身なんですね。今から振り返ってみると、そのときは社会学のことを意識的に考えていたわけではないんですが、僕にとって見田宗介先生と並んで重要だった先生がいるんです。世界史の先生だった中村磐根先生という高校 1 年のときの担任の先生です。

僕は不登校気味で学校に行かなかったんですよ。僕の通っていた高校は自由な学校だったんでサボっていても何も言われなかった。ただ、僕は学校に行かない割には成績が良かったんです。だから勉強についていけないから学校に行かないわけでもなさそうなのになんで来ないんだみたいな感じが先生にすればあったんでしょう。高校 1 年の夏休み前、先生に「ちょっと職員室に来ないか」みたいな感じで先生といろいろと話したんですね。

そのときに、合格が決まったあと、入学手続きをするときに提出していた作文について先生が話してくれたんです。その作文は、なんでもいいから好きなことを書いてきなさいというもので、僕自身は中学の頃から自分の考えを書いたりするの好きだったんです。ただ高校に入るまで学校の先生に提出するものについては先生に喜ばれるようなものを書いていたんです。要は、初めて試験の成績と関係もないわけだからと思ってその頃いつも考えていたことを思いのままに書いたんです。そしたら中村先生がその作文について「大澤くんの言いたいことはこんなことなんだ」といったように解釈してくれたわけ。

僕はすごく驚いた。それまでは自分の中で思ったことについて一生懸命説明を尽くしても人は簡単にわかってくれないと思っていたのに——それは今でもちょっとは思いながらいいものを書こうとしているんですけどね——先生は僕がうまく言えていないようなことまで含めて正確に解釈してくれた。そのことに驚きを感じて先生を尊敬するようになった。

中村先生は社会科学研究会という研究会の顧問でもあったんだけど、実際は先生がやっている読書会だった。今から考えてみると、60年代はスチューデントパワーの時代であって、そうした研究会は60年代末から70年代ぐらいの運動の拠点でもあった。僕はそういう運動には関わっていませんでしたけど、そういう雰囲気の中で今でも読むような本を初めて読んだ。たとえば、マルクスを初めて読んだのもそのときです。最初に『経済学批判』を読んで、それから『共産党宣言』は簡単だから英語で読みましょうということで初めて英語のテキストで読んだ。文学的なものも含めていろいろと読みましたね。おそらくそうした中で自然と今考えているような問題意識が育ったと思います。

駒場時代——見田宗介と廣松渉

大澤　社会学をはっきり意識したのは大学に入る直前ぐらいなんですよ。元々、僕自身は数学とかが好きだったんですけど、数学は閉じられた世界のようで、自分の生きるうえでの本来の関心と切り離されているように感じたんです。それで大学受験直前に理科1類から文科3類に出願先を変更しました。なんとか運良く合格したんですけどね。

合格発表後の1977年3月に松本の書店で真木悠介の『現代社会の存立構造』に偶然のように出会って、それを読んでものすごく感激したんです。さっき言ったように中村先生のところでマルクスなんか読み始めていた。今考えてみれば、『資本論』を先に読んだ方がよかったと思うんだけど、当時は『経済学批判』からマルクスを読んでいたから、自分の中でマルクスの言っていることを掴みきれていなかった。ところが、見田先生はものすごく明晰にしかも広がりのある形で説明していた。それで大学に入ったらこの先生の授業に出てみようと思った。大学に入って紙のシラバスをめくると見田先生の「比較社会学演習」というゼミの紹介があった。これがまた本以上にさらに面白そうなことが書いてあるんですよ。

ただ、見田先生のゼミは希望者が何百人もいるんですよね。ゼミなので20人ぐらいがリミットになっているのにどうするのかなと思っていたら先生から800字ぐらいのエッセイを書いてきなさいと言われた。後で先生は「あれは学力を見てるわけじゃなくて性格を見てるだけですよ」とおっしゃっていた。本当はどうなのかわからないですけど。

とにかく自分にとっては見田先生の講義は感動的に面白かったですね。もし見田先生が、たとえば哲学とかをやっていれば、多分哲学を勉強していたでしょうね。東大の場合、進学振り分けで分野を決めないといけない。そのときに社会学と決めたわけだけど、自分の意識の中では、1つのディシプリンを選んだという気持ちがあんまりないんですよね。ただ自分にとって気になることを考えていくときに最も自分にフィットしている場所を考えていったら自然とこうなっていったという感じですね。

それからそのころは相関社会科学コースがまだなかったんですよ。僕が卒業する頃にはできるというような話があったんですけど。僕自身はまだない大学院を目指すのもあれだし、見田先生の授業は駒場に来て受ければいいと思って本郷に進学した。たとえば、僕とほぼ同年齢だと吉見俊哉さんなんかは学部で相関社会科学コースに行き、大学院は本郷のほうを受けるみたいな感じでしたね。

――見田先生の講義以外ではどんな講義が印象に残っていますか。

大澤　さっきも言ったように、僕自身は社会学という学問だけをやろうという気持ちでやっているわけでもないもんだから、自分に興味があれば講義を受けるという感じだった。自分にとって意味があったものでいうと、廣松渉さんの講義ですね。

当時文科 3 類は「哲学概論」と「哲学史」のどちらかを受けることが必要だったんですよ。「哲学概論」は末木剛博先生が担当していたんですが、末木先生の授業は点数が取りやすいとされていて大体の人は末木先生の授業をとっていました。「哲学史」は廣松さんがやっていたんですけど、きわめてわかりにくくて進学振り分けで不利なことになるという噂がありました。ただ、僕はそういう情報に疎かったんですよ。大学受験のときもそうで、後で周りの人がみんな受験のエキスパートであることを知ったね。世の中に受験勉強用の対策だとか模擬試験だとかがあることをよくわかっていなかった。だから、互いに試験対策で模範回答を作り合ってだとか誰が単位を取りやすいとかそういう情報にまったく疎かった。

でも、廣松さんの授業は、僕にとっては非常に面白かった。廣松さんにはどういうふうに哲学をやるのかを学びました。サルトルなんかが偉かった時代でもあったからサルトル全集を高校のときから読んだりして哲学的なことをやっているつもりではいたんだけど、廣松さんを通じて、哲学とは何であるかを学んだ。

そうだな……学問的というか思想的に意味のあることを少し言っておくとね、これは僕の強みでもあるし弱みでもあるところに関わるんだけど、見田先生の文章というのはものすごく詩的じゃないですか。別の言葉で言えなくはないかもしれないけれども別の言葉で言ったら萎んでしまうような魅力を見田先生の詩的な言語は表現する。それによってはるかに高いところまで見えたり、世界が広がる。そういった見田先生の文学的・詩的な文章にはやっぱり憧れる面はありますよね。

ただ、見田先生に憧れているんですけど、他方で、自分ではそういうふうにやろうとするのではなくて逆を考えたんです。年齢は少しだけ廣松さんのほうが上ですけど、見田先生と廣松さんは同時代の人です。『現代社会の存立構造』は廣松さんの仕事を意識されている。ただ、お互いの仕事に対して敬意を持ちながらやっているけど、ものすごく対照的じゃないですか。廣松さんというのはね、率直に言うと、文学的な香りがゼロに近い。見田先生の詩的な直感は、ありきたりの思弁的概念をはるかに超えた深さがあるんですよ。真面目な概念で捉えようとすると浅いところまでしか捉えられないのに、見田先生の詩的直感はそうした思弁的概念がとらえるところをはるかに超えたところまで行くわけですよ。それで僕は、今はそれほどでもないんだけど、とくに若い頃はわざとに近いぐらい自分の言葉遣いから詩的な香りをなくすということを意識した――普通の社会学の論文よりは文学的だと思われていることもあるんだけど。

僕としては詩的なレトリックを外していわば乾いた概念でやろうとしたんだけど、それは廣松さんから学んだと思う。廣松さんの大学院の演習に出たりもしたり、助手になったあとも、常設のメンバーではなかったんだけど、廣松さんのプライベートな社会思想研究会みたいなところによく呼ばれて話をしたり、コメントをしたりとかもしていたしね。

あとは大森荘蔵先生の授業なんかも面白かったですね。この人は廣松さんとまた別で話の天才なんですよ。廣松さんは……たしかに話が下手くそなんですよ（笑）。見田先生もそんなに上手じゃなかったですけど、廣松さんはもっと下手くそでわかりにくいと言われるのも無理もないみたいな感じもあった（笑）。よく聞いていればわかるんですけど、一瞬でも気を抜くと話がどう繋がっているのかわかんなくなるみたいなところがあるんですよ。

だけど大森さんは流れるように自分の考えを話していた。大森さんの文章を読んだことがあるならわかると思いますけど、大森さんは少しソフィスト的じゃないですか。授業でも論争を学生たちに仕掛けてくるわけですよ。たとえば、「過去は存在しない」とかいうことに対して、学生たちがあの手この手で反論するんだけどそれに全部答えていくみたいな。そうした面白みがありましたね。

本郷での講義——自由度のある社会学

大澤　……社会学の先生のことを何も言わないのもよくないか（笑）。社会学の先生の授業も面白かったですよ。当時は、庄司興吉さんが社会学史の授業をやっていました。非常にいい講義だったと思うね。庄司さんの講義は、基本の図式がはっきりしているんですよ。近代主義対マルクス主義という大きな枠組みの中で社会学は展開しているんだということを言っていましたね。庄司さんは日本の社会学史についても世界全体の社会学史についてもそういう図式で考えていましたね。

吉田民人先生も高橋徹さんも富永健一さんもそれぞれの個性を表した講義でしたね。吉田先生は絶対にノートを持っていかないというのが彼の美学なんですよ。ノートを見ながら講義するのはかっこ悪いと思っているらしく手ぶらで来る。ただ、テープ起こしをすれば論文になるような講義をやるんですよ。見田先生は逆でしたね。見田先生は講義ノートを持ってくるんですよ。でもその講義ノートは見田先生の本になるようなものが書いてある。多分もう論文に近い形のレジュメができているんでしょうね。誰かが言っている説を紹介してるわけではなくて真木悠介の考えたことが書いてある。

ちなみに僕の講義はどちらかというと見田さん方式なんですよ。当たり前なんだけれども、講義で大事なのは内容なんだよね。講義をするために最近はパワーポイントもあったりしてプレゼンテーションの仕方とかを工夫するわけですし、僕もそういうのを作ったりはしますけど、どんなに綺麗なプレゼンテーション資料があっても内容がないとやっぱりダメなんですよね。廣松さんの授業だってわかりにくいけどよく聞いていると内容があるので面白い。だから講義が面白くなければいけない。

僕が講義をするときに気にするのは話す順番。何をどういう順番に話すかで入り込み方が違ってくる。講義をするときにまずは自分が喋る順番を間違わないようにしようという気持ちがある。講義後に今日は喋れなかったなと思うとなんとなく気分がその日 1 日落ち込む傾向があるので、講義が終わった後にも言える範囲ではちゃんと言ったという気持ちになった方がいいというのがあってね。だから見田先生方式に近いやり方で順番を間違えないようにしようと思ってノートを作ったりするようになりましたね。

本郷では、坂部恵先生の演習で、モーリス・メルロ＝ポンティを読んだりもしていた。だから哲学のほうに進んだって不思議ではなかったんだけど、では誰を研究するのか。当時は自分が選んだ先生によって研究する対象が決まってしまうところがあった。たとえば、フランスの哲学をやろうとしたとき、当時はまだジャック・デリダが生きていた。デリダの研究をしますと言ったら許されなかったと思いますね。まだ評価も定まってないと言われて。ベルクソンでギリギリだったんじゃないかな。そういう制約をされるのは嫌だったんですよ。

見田先生の研究は文化人類学に近いところがあったけど、文化人類学だとフィールドを決めなくてはいけない。それなら比較社会学をやると言ったらとくに何も言われないだろうと。それでも、見田先生は何も言いませんでしたけど、ほかの先生には結構うるさく言われましたね。とにかく自由度があったので結果的に社会学に行って良かったと思います。

学生紛争と知的活動

――過去のインタビューでお聞きした先生方、橋爪大三郎先生、江原由美子先生、長谷川公一先生、山本泰先生は、学生紛争の影響についてお話しされています。ただ、佐藤健二先生のお話だと、佐藤先生ぐらいの世代になると学生紛争はそれほど関係のない世代だったということです。大澤先生は当時のキャンパス文化はどういうふうに見られていましたか。

大澤　僕は佐藤さんよりさらに 2 つ下ですからね。もちろんそういうものはほぼ終わっているんですけれども、兵どもの夢の跡みたいな、ここはかつて戦場であったといったような雰囲気がまだ残っているわけですよ。新左翼の内ゲバみたいのがあったりして昨日血だらけになって人が倒れていたとか「何々研究会は革マル系だから」とかはありましたね。大学生や大学院生だった当時の自分はあまり意識してなかったのだけど、考えてみると僕が小学校の上級生だった頃から中学生ぐらいのときが学生運動のピークだった。そういうプロセスの中で思春期を過ごしている。

今振り返ってみて、社会学をやる原点をたどると、本当は中学生ぐらいの出来事が影響している気もするんですよ。中学のとき、生徒会手帳に生徒の自治を重視するといったことが書かれていた。といっても本当はそんなことはないわけですけど、僕は建前として言われている生徒たちの自治を文字通り受け取ったことがあった。それで、僕が 2 年になるころ、生徒会に改革を訴えたことがある。生徒会活動の一つに応援団があったんだけど、そこがいじめの巣窟になっていた。ただ、応援団自身がいけないわけではなくて、クラスの中で嫌われている人が応援団に選ばれていた。当時の中学生の美意識からすると、旧制中学みたいなことをやりたくなかった。それを僕が問題だと思って、応援団自体をやめてしまえばいいんだと提案した――今考えてみると、それは抜本的な解決なのかどうかは社会学者としてはゲットーをなくしたとしても差別がなくなるわけじゃないと疑問に思うところはあるんだけどね。それで学校全体を大論争に巻き込んだりしたりしたことがあった。そのときに人を説得することの難しさであったり、1 つのことを考え抜くことの大事さを学習するようになった。その中で自分は自然とものを考えるようになったり、文章を書くようになった。

要するに、日本あるいは世界の先進国の空間が持っていた当時の空気を自分も中学生の身

ながら吸っていたんですね。そのときに経験したことが現在の知的な活動・学問的なものに繋がっていったみたいなのがあると思います。

教員と院生の関係——対等な関係

——過去のインタビューによると、院生と教員間の対立、教員どうしの対立があったとのことですが、大澤先生は当時の社会学研究室をどう見られていましたか。

大澤　当時の院生たちは自分と先生は基本的に対等であると思っていたと思うんですよね。だから今から振り返ってみると、先生たちもある意味では偉かった。先生たちも院生のやっていることを正面から受け止めていたと思う。院生のほうは基本的には対等というスタンスがあるから、先生から何かを教えてもらうのではなく先生の説を聞いているわけですよ。その説には私は賛成できないみたいに。僕たち以上に橋爪さんの世代はとくにそうでした。

あの頃の社会学の理論上の中心は、構造–機能主義でしたからね。日本におけるリーダー的な存在が富永さんと吉田先生だったわけで。橋爪さんと恒松直幸さん、志田基与師さんが構造–機能主義批判をやっていたんですが、その論文は今も読まれますか。

——僕は読んだことがありますが、今は文脈を知っていないと論文の位置づけがわかりにくく、読んだことがある人はほとんどいないかもしれません。

大澤　なるほどね。構造–機能主義自体がすでに朽ち果ててしまっているのでそれを批判することに今ではどれくらい意味があるのか、わざわざ今勉強する必要のあることではないのかもしれません。ただ、当時は最も重要な理論的支柱だったんですね。言ってみれば今でも機能主義それ自体は基本的なものの見方ですよね。たとえば「なぜ警察はあるのか、治安を維持するためだ」と説明をすれば機能主義的な説明になっているわけです。それに対して怯むこともなく全部間違っているという批判、それも学問的に洗練された批判だったんですよ。当時の構造–機能主義批判で多かったのは、外在的な批判で、体制を擁護する理論だみたいな批判で、論理が破綻しているというような批判ではないんですよ。それに対して橋爪さんたちは洗練された批判をやっていた。

その頃の構造–機能主義批判は二段階になっていたんですよ。最初のステップの方が理論的にはより洗練されていたんですけど、社会の機能的要件がいくつあるのかと考えていくと、たとえば、タルコット・パーソンズの場合だと、AGIL のように 4 つある。でも社会は 1 つだからその機能的要件を足し合わせなくてはいけない。

民主主義を例に考えてみると、A さんが 1 番良いと思う社会、B さんが 1 番良いと思う社会、C さんが 1 番良いと思う社会……というようにみんなの意見を集計して 1 つの社会的決定に持っていく。構造–機能主義の場合も、それと同じ構造を持っている。簡単に言うと社会的選択理論が取り組んだ問題です。民主主義的な決定は実はパラドックスを持っていて、選択の結果、非合理な結果を導くということを社会的選択理論は証明する。1 番有名なのはケネス・アローの不可能性定理ですが、構造–機能主義批判の第一段階はそれをそのまま転用しているんですよ。

機能的要件の統合というのも民主主義のパラドックスと同じようなパラドックスを抱える。要は機能的要件を合理的に統合することはできない。社会に機能的要件がいくつもあると考えた瞬間に理論が破綻してしまうというのが第一段階の批判です。

第二段階の批判は、たしかに機能的要件はいくつかあるかもしれないけど、優先順位があるかもしれないという批判です。たとえば、経済成長そのものよりも社会の存続のほうが重要だったりもするわけです。そうであるなら、機能的要件の優先順位がアプリオリに存在する可能性がある。優先順位があるのなら、第一段階の批判のように、それぞれの要件を等しいものと前提し要件の統合が成り立たないという批判は十分ではないかもしれない。本当は優先されるべき機能的要件が 1 つしかないということも言えるから。

橋爪さんたちの批判は、第二段階の批判で、仮に機能的要件が 1 つであったとしても社会の変動がうまく説明できないということを証明しようとしたものです。ただ、第一段階の批判に比べると、数学的な洗練さが少し落ちるんですよ。僕がなんでその話をしているかというと、実は、僕も第二段階の説明については批判を試みて発表したことがあった。

構造–機能主義の場合、機能的要件をアプリオリに与えてそこから社会を考える。ただ、もし、ルーマン的に機能的要件が自己準拠的である、そうした理論を作ったとしたらどうなるのか。そうすると、数学で言えば、自己言及のパラドックスのように、ゲーデルの定理と同じ問題を導くことができる。ただ、僕の批判については論文としては書いたことがなく、国際学会で英語で発表したんですよ。そしたら、すごく褒められた。今まで日本の学会発表でもそんなに褒められたことはなかったなと思うぐらい。うちの国に来ないかみたいなことまで言われたりしましたね。結局長い間論文にしなかったんですけど、後になって弘文堂から出した『社会システムの生成』（2015 年）に収めました。

いずれにしても当時の学生たちは先生たちの理論に挑戦するという構図があって、先生たちも正面から受け止めてくれていたと思います。富永さんとかはあまり批判に興味を持たれていなかったけど、吉田先生は敏感に反応されて、あの手この手で橋爪さんたちに応答しようとしていた。志田さんは吉田先生の弟子で、自分が可愛がっている弟子が自分の理論に文句をつけているぞといった感じだった。そういう意味で言うと、学生と先生の間に基本的には非常に対等な関係があったと思うんですね。

今喋りながら少し思ったんですけど、当時、ほとんどの人が修士論文は書くけど、博論は書かない時代だった。修士論文が終わってしまえば先生に合否をつけられることはもうない。修士を過ぎたところで自分の考えを論文として発表することになるので比較的対等になりやすかったかもしれないですね。

ただ、今だと、先生に嫌われて博士論文が通らなかったら困るじゃないですか。今の若い研究者はどうですか。

――今は博士号取得のために教員に積極的な指導を求める院生が多いかもしれません。そうすると、かつてのように先生方の説に挑戦する院生はほとんどいないかもしれません。

大澤　あの頃はまだ博士号を取るのは普通ではなかった。僕が博士論文を出したのは先生たちに対する挑戦という感じがちょっとあった。どういうことかと言うと、当時は博士号を取

らないのが習慣でした。富永先生だけは持っていましたけど、他の人は誰も持っていません。偉い先生でもね。大学院に入ったときに、先生たちはオリエンテーションで一応言うんですよ。修士論文だけではなく、できるだけ博士論文も書くようにしなさいと。でも書く人はいないなって言う方も聞いている方も心の中では思っているんですよ。博士論文を書かずに、どこかに就職して、もし書くとすれば、自分の学者人生の一番最後に集大成的なものを母校である東京大学に出すというだけの話で、博士号はあってもなくてもいいというような時代だった。ただ、僕はわざと出したんですよ。宮台真司さんもほぼ同時に出していますけどね。そうすると僕や宮台さんのものをそこで落としたら、もう永遠に誰も出さなくなりますよね、博士論文を。だから、「どうしますか」という感じで出したんですよね。吉田先生がだいぶ驚かれていましたけどね、「え、出すの？」みたいな感じで。その後ポツンポツンと出すようになって、今ではみなさん普通に出すのが当たり前で、博士号を取らないとなかなか就職も難しいという感じになっていますよね。

当時の先生たちは、先生によってタイプが違うんですけど比較的指導しないんですよね。修士に入ったときに先輩たちがやってくれるオリエンテーションみたいなのが今でもあると思うんですけど、その場でこういうことに気を付けて勉強した方がいいとか、先生は必ずしも皆さんがやろうとしていることについての専門家ではありませんから何か教えてもらえると思っているのなら間違いですよと言われたりしましたね。

考えてみれば、社会学でやれることの数の方が先生の数よりずっと多いわけじゃないですか。先生たちがやっていることを縮小再生産してもしょうがない。先生たちがまだ手をつけてないこと、あるいは先生がやっていたとしても先生の議論では満足できないから研究をやるわけです。先生が答えを知っていることを書いても、学術論文としては成り立たないわけで。論文というのは仮に小さくても新しい知見が入ってなくてはいけない。

まあこうしたことは、指導をしないことに対する先生たちの適当な言い訳になった可能性もあるかもしれない。たとえば、見田先生ははなからあまり指導する気がない先生だった。「こういうことを書こうと思っている」みたいなことを先生にゼミとかで話したり、個人的にも相談することはあったんですけど、それも年に 1 回か 2 回ですね。でも見田先生は天才で一言か二言ぐらいちょっとしたサジェスチョンをしてくれる。「なるほどそういうふうに考えていけばいいんだ」とか「こっちのほうにも入口があったんだ」みたいに新たなことを発見する、そういった経験がありました。

吉田先生なんかは、学生がどんな文献を読めば良いかと聞くと、「その文献を探すこともお前の仕事である」と文献すら指導しない、そういう感じだった。比較的よく指導したのは富永さんと高橋さん。ただ、高橋さんなんかは介入する傾向があって学生たちにとっては抑圧的な感じになることもあった。富永先生は自分の社会学観みたいなのがはっきりしている人だったので学生も覚悟がいります。

吉田先生、富永先生は構造–機能主義の立場にあるんだけど、人間のタイプというかベースがかなり違っていましたね。富永先生は「社会学とはこうだ」という考えがあって、その内側をきっちり開拓しなくてはいけないんだと考えていたのに対し、吉田先生は社会学の境界

を壊していくタイプだったので、学生たちにも自由にやっていいよという感じでした。

僕らが院生のとき、少しめんどくさかったのは、先生たちが一国一城の主といった感じが強かったんですよね。そうすると、いい意味でも悪い意味でもライバル関係になる。僕はそういうことに鈍感で空気を読めないからあまり気にはしてなかったけど、考えてみると結構センシティブな問題で、院生にとっては若干のストレスになっていたかもしれない。

ただ、いい意味でのライバル関係だなと思うのは、吉田先生と見田先生。見田先生は吉田先生をライバルとは思っていなかったと思うんですけど、吉田先生は見田先生を意識していたと思います。吉田先生は、理論上は富永さんに比較的近いし、高橋さんとかとも色々あったけど、すごく意識していたのは見田先生だった。授業でも演習でも見田先生の話が出てくる。「見田くんの言っていることはこうだ」と吉田先生なりの解釈をしていた。

吉田先生は、パーソンズがよく作るような座標空間を作る。それで自分は座標空間の全体を視野に収めているんだ、いわば山の地図を描くのが偉いと言うわけ。さらに、見田くんはこの第 3 象限のことをやっているんだ、廣松さんは第 2 象限だとかなんとかそんなふうにいうわけですけど、僕らは、「地図があってもそこまで行かなきゃしょうがないじゃないか」と思ったりもして当時ちょっと揶揄したりもしていた（笑）。僕は山を登るために地図を描くのであって、登らなきゃしょうがないじゃんと思っていましたね（笑）。ただ、吉田先生と見田先生は、ライバル関係というか知的に切磋琢磨していたと思う。

院生同士も切磋琢磨というかライバル関係にあったと思うし、先生よりも自分と同世代だったり、自分よりちょっと上の世代から学ぶことの方が多かったんじゃないかな。

――研究室外の研究会も含めて、どういった研究会に参加されていたのでしょうか。

大澤　当時は、橋爪さんたちが始めた言語研究会が 1 番大きい研究会でしたね。別に言語の研究しているわけではなく、理論的な思考を持った人たちが何をやってもいいみたいな感じの研究会でしたね。多分、初めの頃は構造主義の影響が大きかった研究会だったと思うんですよね。橋爪さんの修士論文はレヴィ＝ストロースを扱ったものですけど、レヴィ＝ストロースをはじめとする構造主義者は、ソシュールとかヤコブソンとかの言語学の影響を受けていますよね。それから、チョムスキーに発する生成文法なんかもどんどん発展している時代で、可能性を感じさせた。当時、言語の研究は先進的な学問で、それを社会科学に応用すると、大きなイノベーションがあるんじゃないかという直感が言語研にはあったんでしょうね。構造–機能主義とは違ったタイプの理論をどう作っていくのかという流れがある一方、マルクス主義の勢いが失速し始めて構造–機能主義と同じぐらいに説得力が感じられないときに、言語研究会ができたわけですね。

言語研究会は社会理論を扱う研究会なんですけど、どちらかといえば、構造–機能主義に対してクリティカルなスタンスを持つ人が主に集まっていた。

あと、現象学系の社会学も盛り上がっていましたね。現象学と構造主義は水と油ぐらい違うけれども、構造–機能主義を脱構築しなくてはいけないという点では同じスタンスだった。僕もそうでしたけど現象学系のことをやっている人もたくさんいましたね。

言語研は、元は東大の院生たちを中心にしていましたけど、だんだんといろんな大学の院

生が入って、メンバーは100人を超えていたと思います。年に2回ぐらい合宿をするすごく真面目な研究会でしたね。

真面目な研究会だったから、研究会が終わった後、打ち上げをしようとか、忘年会でもしましょうとかそういうことが全くないんですよ（笑）。普通、研究会に行くと大体は夕方までやって、「最後にビールを飲んでいきましょう」みたいなことになると思うんだけど、言語研は隔週金曜日に実験室でやっていました。今でもありますよね、あそこは本当に実験ができるんですよね、実験をやっている人は見たことがないですけど……。

当時は実験室が入っている法文2号館は19時になると鍵がかけられるので、研究会はいつも13時から19時までにやることになっていたんです。それで、19時に終わって帰ればちょうど夕飯の時間なので、何か帰りに食べればいいじゃないかなと思うんですけど、みんなさっさと帰るんですよ（笑）。それは多分メンバーの中心にいた橋爪さんの影響じゃないかなと思いますね。橋爪さんは無駄なことが嫌いなストイックな方でしたね。「研究会だろ、なんで食事するのか」といった感じでした。それでも年に1回か2回ぐらい無理に橋爪さんを誘ってみんなで食事をしたことがありますけどね。

当時、法学系の助手とか大学院生と一緒に言語と法に関する研究会をやっていたことがあるんですよ。当時H. L. A. ハートとか法を言語論の中で考えたりする人たちがいたりしたのでね。あるとき、法学の院生の方が「次回は12月になりますから、終わった後、忘年会をやりましょうか」と提案をされたんですよ。そしたら橋爪さんが急に、「忘年会？ 聞いたこともない言葉だ」、「我が辞書に忘年会という言葉はないぞ」といった感じの雰囲気を出されて、結局、忘年会をやらなかった記憶もありますね（笑）。ともかく、非常に無駄のない研究会でしたね。

あと、早稲田と慶応とかほかの大学院の人たちと一緒になって現象学系の研究会をやっていましたが、それはのちに日本現象学・社会科学会になりましたね。

ほかにも、僕の場合は社会学以外のゼミにも出ていましたね。フランス文学の野崎歓さんは僕の同期なんですけど、彼や、そのほかの仏文やフランス哲学系の人と一緒に、短期間でしたがフーコーの『言葉と物』やドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』を読んだりもしましたね。ちなみに、野崎くんのフランス語の力はすごかったですね。その頃から、彼が、フランス現代文学の訳者として第一人者になるのは決まっていた、という感じがする。

『身体の比較社会学』の執筆の動機——理論上の原点としての「身体」

——後に『身体の比較社会学』につながる修士論文はどのようなご関心で執筆されていくことになったのでしょうか。

大澤　少なくとも大学院に入ったときにそういうことをやろうと決めていたんですよね。当時の大学院は先ほど言ったように変則的な構造でした。大学院になると駒場の先生たちもスタッフに入ってくる。学部のときは形式的に言えば吉田先生のもとで卒業論文を書いているんですよ。吉田先生はなんとなく大学院でも自分のところに来ると思っていたと思うんだけど、僕ははじめから見田先生狙いで見田先生が大学院の指導教官になるんですね。大学院の

オリエンテーションがあったその日に見田先生が駒場からわざわざ本郷に来て、オリエンテーションが終わった後、見田先生を指導教員にする同期の奥井智之くんと先生と一緒に「ルオー」という喫茶店で話をしました。「修士論文のテーマは身体の比較社会学にしようと思います」と先生に言ったら、「それはとてもいい」という反応だった。先生も『時間の比較社会学』を書いているときでした。そこには比較社会学についてすごく魅力的なテーマが並んでいるじゃないですか。その中に「身体の比較社会学」ももちろん入っているんです。でも多分ね、見田先生から見て「こうあってほしい」とか「こういうふうになる」みたいなことを僕がやったって感じではないんじゃないかと思うんです。どういうことかと言うと、『身体の比較社会学』で先生がイメージしていたものと、僕が実際に書いたものとの間には、かなりギャップがあったと僕は思います。つまり先生の期待を読んで書いていたわけじゃないという感じがあるんです。

当時は大きく見れば機能主義系のものとマルクス主義系のものが二大軸になっていて、ちょっと外れながら機能主義批判に連なる現象学系のものがあった。要は理論が戦国時代みたいなことになっていて、誰もヘゲモニーを持っていない。しかも既存の理論のどれに対しても自分は完全にコミットするほどには信頼を置けていないと思っていた。だから0から自分で考えることになった。学問の状況を見ながらそう思ったというか、自然とそうならざるを得なかったんですよね。0から考え直すってことを考えたときに、「身体」の直接的なインスピレーションの源泉になったのはメルロ＝ポンティなんですよね。フッサールの現象学よりもメルロ＝ポンティが言っていることにはすごく興味がありましたね。

ただ、メルロ＝ポンティの言っていることはあまりにも原理的すぎた。僕らが最終的に説明したい現象は、現代社会の中で起きているさまざまな出来事であったり現象であったりするわけじゃないですか。それを説明するにはメルロ＝ポンティの議論はあまりにもベーシックなことにしかなっていないのではないか。やっぱり社会現象というのは、理論をやってから現象を説明するというふうにやるとなかなかうまくいかないんですよ。理論だけ作ると畳の上の水練みたいになるんです。比較社会学というフォーマットの中で理論を準備しながら社会学をやる。そういうことを考えて、現象学が着目しているような意味での「身体」をひとつの理論上の原点にしながら考えていくことになっていったんだと思いますね。

『ソシオロゴス』の位置づけ——学界を超えた雑誌

——『ソシオロゴス』には大澤先生も多く書かれていると思いますが、当時はどういう雑誌として位置づけられていたのでしょうか。

大澤　当時博士論文を書かない時代だと考えると、若い大学院生にとっての修士論文の意味は大きかった。修士論文は学者としてのデビュー的な意味が非常に大きいので、その修士論文の成果から一番いい部分を投稿する。『社会学評論』をはじめとする査読付きのものもありますが、率直に言うとみんな査読をあんまり信頼してないところもあったと思うんですよ。院生は自分の先生の言うことさえ正しいと思っていないですからね。そのうえで、自分よりもできるのかよくわからない査読者にリジェクトされて「なんなんだ」と。それに対して、

もっと自由に論文を発表する機会、でも完全なフリーハンドではなく、学生たちの相互批判という形でお互いに認め合う場として『ソシオロゴス』があった。

今もそうだと思いますけど、当時は学生同士の間でお互いを評価するということがあって、そのことを先生たちも意識していましたね。つまり学生たちが誰を評価しているのか、「橋爪さんはなかなか就職していないけれど、みんながすごく評価している」というのは、先生たちもよく知っていました。

当時『ソシオロゴス』は社会学界を超えて注目されていたと思います。当時僕の本や橋爪さんなど社会学者の本を出していた勁草書房の有名な編集者で富岡勝さんという方がいました。若い頃、廣松さんの主著も出していました。その富岡さんとかが、『読書人』だったかな、書評系の新聞に有名な編集者 3 人ぐらいがペンネームで持ち回りのコラムを書いていた。どの編集者も、若手で優れたライターを虎視眈々と狙っていて、「まだ無名だけれども実はこの人すごいぞ」という人を探し回っているわけです。そのときに、密かに自分が知っている鉱脈みたいなものがあって。その中に『ソシオロゴス』という雑誌があるんだということを富岡さんがコラムで書いているんです。そこに僕や宮台さん、橋爪さん、内田隆三さんの名前が出てくるんですけど、そういうふうに編集者たちは「知る人ぞ知る」、だけど「どこよりも面白い論文が実は載っている」雑誌として『ソシオロゴス』を見ていた。

やっぱり自分が学者となるまでのプロセスで本や論文をたくさん読むわけじゃないですか。大学院に入るくらいには、学会誌も読むようになるわけじゃない。ただ、必ずしも学会誌に書いてあるものが面白いとは限らない。どちらかというと、たとえば当時、雑誌として面白かったのは思想系の雑誌ですよね。『思想』とか『現代思想』。見田先生も『思想』や『展望』で主なものを発表されていて、それが衝撃的に面白かった。そうすると自分も、どちらかというとそういうメディアの方に気持ちが向くということがありましたね。

最初に自分が一般向けに書いた論文は『思想』（1982 年 8 月号）に載せた論文です。今考えてみるとかなり若い。というのは当時修士論文も書く前ですからね。これは見田先生に言われて、見田ゼミやその他の機会で、さっき言った「身体の比較社会学」をどんなアイデアでやるのかという話をいろんな時にしていたんですよ。その時たまたま『思想』で「身体」という特集号を組むということで、見田先生もその特集号に執筆することになった。あれは見田先生に対する菅孝行さんという演劇評論家からの批判に見田先生が答えるという形式の論考でしたね（真木悠介「卵を内側から破る——菅孝行『関係としての身体』応答」）。「その特集にお前も書きなさい」といった感じで言われて書いたのが「物質と形式の交わるところ——社会的身体論の試み」でしたね。その時にはじめて不特定多数に向けて文章を書きました。

冷戦、オウム事件――根本から考え直すこと

――修士課程を終えられた後、1980 年代から 90 年代にかけて、理論的な社会学の研究をされると同時に、いわゆる社会批評を展開されていくと思います。一連の研究や社会批評について、1980 年代から 90 年代の時代の転換期や出来事についてはどういうふうに見られていたのか、あるいは大澤先生のご研究にどういった影響あったのかについて教えてください。

大澤　具体的に起きている事件と自分の議論を積極的にリンクさせることを意識的に思うようになったのは、一番大きいのはオウム事件です。『電子メディア論』を書いていた頃から意識し始めるんですけどね。でもね、自分のやっていることを無意識の部分も読み取りながら知識社会学的に考え直してみると、ちょうど冷戦の終わるころ、ある意味で 20 世紀的なものが終わろうとしている時期の予兆みたいなものを遡れば、20 年ぐらい前には「1968 年」という大きな時期がある。その結果が冷戦の終結につながっていると思うけれど、そういう時期に自分は若い研究者としての準備をしていた。その頃自分がやっていた最初の仕事はすごく抽象的なんですけど、簡単に言うと、「根本から考え直さなきゃいけない」みたいなことがあったんですよね。根本から考え直すということは、基本的に理論的なものなんだけど、そう思ったのは、冷戦の終結を迎える時期の中で、イデオロギーとかそういう世界観みたいなものがキャンセルされそうになっているときに、一番根底から考え直さなきゃいけないみたいなことがあったということなんですよね。それで、だんだんと自分の理論や「身体の比較社会学」を考えるようになる。

「身体」が自分の中ではっきりと理論的な言葉としてあらわれたのは、考えてみると卒業論文なんですよね。卒業論文は自分の成長にとってはそれなりの意味がある。結構長い卒業論文なんですよ。マックス・ウェーバーについて書いているんですが、独特の工夫になっているんです。卒論の第 1 部はマックス・ウェーバーの『宗教社会学論集』の「儒教と道教」を精読するみたいな感じ。精読の理由は、直感的に言うとウェーバーの理論の中に構造的な盲点があると考えたから。ウェーバーに知識が欠落していたとか、調べ方が足りなかったということを言ったんじゃなくて、ウェーバーにある種の構造的な盲点があるぞ、みたいなことを見るための作戦として「儒教と道教」を読むんですよ。その後、第 2 部と第 3 部ではウェーバーの理論を 2 つの方向から相対化する。1 つの方向はマルクス主義系のものですよね。マルクス主義は当時、たとえばルイ・アルチュセールを含めて構造主義に連なっていたので、構造主義系のものです。もう 1 つは、アルフレッド・シュッツがウェーバーからスタートしているでしょう。だから、現象学の方向からウェーバーの理論を考える。つまりマクロなレベルとミクロなレベルの両方からウェーバーの理論を相対化していく。その構造的盲点が一体どこにあったのか、その盲点を克服するための理論的な準備をどうしていけばいいのかみたいなことを、2 つの方向から相対化していって、最後に結論に落としていくと。その結論の流れの中で、「身体」の話が出てくるんですね。そこで『身体の比較社会学』の準備が整っていて、卒業論文で到達したところから今度もう一回構築していくみたいな流れで『身体の比較社会学』ができる。その中で、「第三者の審級」の概念も自然に出てくる。

「第三者の審級」については、新しい概念を作ったというイメージは最初なかったんですよ。自然とそういう言葉が出てきた。ところが、誰かが僕の論文に言及する時に、「そういう概念を使っている」と言うので「そうなんだ」と自分では思った。思考のプロセスの中で自然に出てきた言葉というか、概念なんですけどね。

一番初期の頃、30 歳ぐらいの時には、大きな社会、20 世紀が終わる、冷戦が終わる、それはたまたま日本では昭和の終わりと連動していくという、その終わりの中で、根本から考え直すみたいなことがあった。それが 1990 年代に出てきたさまざまな社会現象、1 つはインターネットに繋がってくるようなメディア状況の転換があって。でも、最も大きかったのは、やっぱりオウム事件なんですよね。そのときは、35 歳ぐらいになっていますかね。僕はオウム事件の前まではね、正直、新興宗教というか、そういう動きにあまり興味なかったんですよね。でもオウム事件の時には、非常に感じるものが大きかった。みなさんどうですか、覚えていますか？ オウム事件とか。

――出来事があった時の記憶はないのですが、小学生、中学生ぐらいのとき「2 ちゃんねる」とかでオウム事件が風刺されているとかは見聞きしていました。

大澤　多分中学生ぐらいになっていると社会的に認知すると思うんだけど、小学生ぐらいだと、事件が起きていても自分との繋がりとして感じることは難しいですよね。僕は、1968、9 年のとき、まだ小学生だった。連合赤軍事件やあさま山荘事件があったときは、中学生になっていて、その事件は自分の中で非常にリアルなものでした。もちろん、自分はそれに対して、何か思想的に言えた段階ではないですけど、何か身体的に感じるぐらいのインパクトがありました。オウム事件の年はおそらく、日本中全体がちょっと違った空気になってしまった。何か非常に不安定な、われわれの自明性そのものがどこか揺らいでいく、そういう感じが日本全体にあった。

1994 年には松本サリン事件がありました。松本サリン事件が起こった場所は、僕の実家の近くなんですよ。僕は松本出身で、事件の現場は私の実家から 150 メートルぐらいしか離れてないんですね。ちょっと考えられないような事件じゃないですか。当時としては全く考えられないことなので、誰がやったかわからない。何かわれわれの基本的なものの考え方みたいなものがすごく崩れていくわけ。しかも、オウム事件は当時としては若い人たちが関わっていたでしょ。教祖である麻原彰晃は団塊の世代ぐらい、当時 40 代だったはずですけど、それより下のフォロワーたちは 30 代で、事件の中心人物はちょうど僕と同じぐらいの年齢になるんですよね。最もスマートっていうか、クレバーで、人間的にもちょっと面白みもあり、ものの考え方も結構しっかりしているみたいな人で、「そいつは俺のいい友達の 1 人だ、仲良く話をしていると楽しいぜ」と思うような、そういう人たちがなっているわけ。

もっと言えば、オウム事件は当時のポスト構造主義的で、ポストモダンなイデオロギーをカリカチュアライズして形にすればこれになるんじゃありませんかというような、たとえば、デリダが「エクリチュールが大事ですよ」と言うじゃん。これは一種の比喩、一種の冗談で言っているわけですよ。冗談にも真実があるから比喩なんですけれど、つまり「文字通り取るなよ」的なところがあるわけですよ。

でも、それをある意味で文字通り受け取ればオウム事件の世界になるみたいな。「リアリティとフィクションの間には決定的な境界線はないんだぞ」みたいなことを哲学的に言うと、普通に素朴な実在や現実を考えたりした人たちはドキッとするわけだけど、たしかにそれなりに理論的には説得力があるわけですよ。そう言いつつも、哲学者自身は半分言葉遊び的に言っているだけみたいなところがあるんだけど、それを本当に文字通りやれば、ある種フィクションの中でリアリティを生きるみたいなオウム事件が出てくる。僕なんかももちろん理論上は当時の現代思想っぽいものというか、ポスト構造主義的な議論にそれなりに感化されたり影響されたり、シンパシーを感じながらものを考えていたわけじゃないですか。そうすると、この事件が起きたときに、「君はそういうことを考えているんだね。じゃあ考えていることを形にして見せてあげましょう」と言われたら、それがオウム事件になったみたいな、そういう感じがしたんですよ。自分自身はオウム真理教に入るタイプじゃないなとは思ったんですけれども、しかし自分と無縁ではないというか、自分の同時代性をすごく強く感じたんですよね。

皆さんも社会学をやっているから考えると思うんですけど、社会学という学問においては自分自身も社会現象なわけじゃないですか。研究する対象と自分との間に社会科学、とくに社会学には連続性が生まれる。同じ社会科学でも経済学。自分も経済的な主体であり、消費したり生産したりする。でも、あたかも自分とは関係なしにそれを外部に置くことはできるけど、社会現象全体というものを扱う社会学の場合は、研究するものと研究されるものとの間の地続き感がある。オウム事件を見たときに、「自分は社会現象だ」ということをすごく痛烈に感じたんですね。だから、この現象をどれだけ深く分析できるかやらなければいけないことだったし、これが納得できるくらいの深さで分析できなければ、今までやってきたことがただの勉強にすぎないことになってしまうなという気持ちもあった。

95 年当時、僕は千葉大学に勤めていたんだけど、東大で非常勤もやっていた。シラバスを書いた後で事件が起きているんだけど、学生たちも自分たちと同じような年齢の人たちが何かやったりするから、「これは一体なんだ」と思っている。そうすると、それと無関係の話をしてもしょうがないという気持ちがあった。やっぱり今、学生たちが興味を持っているものに対して、どういうふうにそれを社会学者として説明できるのか言えなければ意味がないと思った。それで、結構オウム事件の話をしましたね。その頃の学生さんたちはのちにいろんな分野で活躍されて先生になった人もいて、たとえば憲法学者の木村草太さんは、そのときの授業を聞いていてとても印象に残っているらしくて、何度も話をしたことがありますね。やっぱりただ変なことが起きているということだけじゃなく、当時の学生たちが多かれ少なかれシェアしていたある種の感受性みたいなものの理念型みたいなところがあった。それ以降、酒鬼薔薇事件もあって、割といろんな社会現象を同時進行的に考えるようになった。どうしても学問ですから、ミネルバのフクロウみたいなところがあるんですけどね。それは学問の宿命ではある。しかし、今アクチュアルに起きていることにレスポンスできなければ、社会学は何のためにあるんですか？ みたいなことも問われるので、事柄を一番深いところで捉えたときにどうなるのだろうかということはやっぱり思いますね。

冷戦の終結よりちょっと前、大学院生だった頃に、見田先生が「論壇時評（朝日新聞）」を書いていたんですよね（1985 年 1 月～1986 年 12 月）。あれは最近河出書房新社から復刻されて、僕が解説を書いています（『白いお城と花咲く野原――現代日本の思想の全景』1987 年刊、2023 年再刊行）。今よりも「論壇時評」は長い記事で、毎回夕刊に 2 日連続で出る。見田先生の「論壇時評」は非常に素晴らしい。「論壇時評」なので、その月の論壇誌に載っている論文に対する論評をやる。そうすると普通はどうしたって今このときには関係あるものの、1 年後に読んだら全然意味がないぞみたいなことがたいてい書いてあるわけですけど、見田さんの「論壇時評」は 20 何年経ってから読み直してみても、面白いなと思うことがいっぱい書いてあるわけです。アクチュアルに起きていることに関係づけてそうできるのはすごい技だと思うんですけど、当時も読みながら「ここに書いてあることは今だから意味があるんじゃなくて、社会学という学問全体にとっても意味がある。あるいは知的な、哲学全体にも意味があるようなことを書いているな」と思いながら読みました。見田先生のそれが自分にとっての理想化されたモデルになっていて、ある種の出来事が起きたときに、それを最も深いところで捉えたときには、そのアクチュアリティと普遍性とを両方確保できるみたいな、そういうことを学んでいるか、目標にしてやっている感じがありますよね。

『行為の代数学』――数学的な明晰さ

――『身体の比較社会学』と『行為の代数学』の 2 冊はどういう関係にあるのでしょうか。

大澤　『行為の代数学』で出てくる G・スペンサー＝ブラウンはすごく風変わりな数学者ですけど、僕が知ったのは修士論文よりも後なんです。『身体の比較社会学』のベースは修士論文。『身体の比較社会学』は、『行為の代数学』の元になっている理論を応用してやったわけではなくて、独立にやっていたんですけど、博士課程のときにスペンサー＝ブラウンという数学者、これはルーマンが時々『形式の法則』（初版 1969 年）に言及するんですよね。実際

どんなもんだろうか、読んでみようと思って、それを読んだら、非常に面白いなと思ったんですよ。その本は宮台さんと一緒に翻訳をして 1987 年に朝日出版社から出版しました。

その本は、本文と脚注の量が同じぐらいあるんですよ。本文に数学的な公理があって、定理があって、その証明があってという形式ですが、それらに脚注がついている。脚中がヴィトゲンシュタインの『哲学探究』みたいな感じで、アフォリズム風の長い脚注なんですね。とにかくそれがめちゃくちゃ面白いなと思った。どうしてかというと、自分がそれまで考えてきたことの骨格みたいな部分が、数学的な明晰さを保って表現できるなと思ったんですよ。僕は高校時代までは数学の勉強の方が好きだったところがあったから数学を捨ててきたことに対する未練みたいなものがちょっとあったんですね。自分が残してきた未練みたいなものを、自分の今の仕事の中でもちゃんと統合することができたみたいな感じで、自分としては非常にいいですよね。

すごく良かったなと思ったのは、それのおかげで全然違う分野、とくに理科系では、当時、複雑系の理論とか、カオスの理論とか、そういうシステムの理論がイノベーティブな時期でもあったので、そういうことに興味を持っている人たちが注目してくれた。そういう人たちとの友情が続いていて、仲良くなった一人が郡司ペギオ幸夫くんですよね。郡司くんはある種の天才だと思いますね。彼は僕が東大の助手をやっていたときに神戸大学の助手だったんです。ある日何のアポイントメントもなくいきなり訪ねてきた。それまで彼とは面識がなかったんだけど、いきなり「神戸大学の大学院の集中講義を『行為の代数学』でやってくれないか」と言われた。数学系や理科系の人たちとの縁ができた点ではすごく良かったですね。

あんまり偉い人に例えるとおこがましいですけど、たとえばヘーゲルだって「現象学」と「論理学」があるじゃないですか。『身体の比較社会学』と『行為の代数学』はそれと同じような感じなんですよ、自分の中ではね。当時僕は『現代思想』で結構自由に書けるような状態になっていたので、そこで 1 年ぐらい連載する形で書いて、それをブラッシュアップしたのが『行為の代数学』。それで博士号も取ったんですけどね。多くの理科系の人たちは、それをさらにソフィスティケートさせた数学的な展開を期待していた感じもちょっとあるんですけど。森田真生『数学する身体』（2015 年）ってありますけど、数学だって本当は身体的なものなんですよ。だけど、あまりにも数学が細かくなってくると、身体との繋がりが全然見えなくなってきて、いかに身体と無関係かが数学の勝負みたいになってくるじゃない。スペンサー＝ブラウンの良い点は、論理の一番最初の骨格の部分がいかに我々の経験と同じ構造を持っているかということが綺麗に見えるということなんですよね。

フランシスコ・ヴァレラという人は、スペンサー＝ブラウンの数学をさらに洗練させるとどうなるかというかなり分厚い本を書いていますけれども、あまりそうしちゃうとね、数学的な面白さはあるけど、社会学的な面白さは減ってしまうんですよね。だから一番骨格の部分さえはっきりしていればそれでいいので、ここでストップしたという感じなんですけど、僕にとっては非常に意味のある仕事だったんですね。

理論を通じて社会を深く見る

――『行為の代数学』と『身体の比較社会学』で行われた理論研究とその後のナショナリズム研究、『虚構の時代の果て』といった研究とはどういった関係にあるのでしょうか。

大澤　泳ぎながら技術を磨くみたいな感じなので、自分の中でこの時は理論だ、みたいな感じでやっているわけではないんです。だから、ナショナリズムの研究というのは、結果的に時間もかかっちゃったし、大きくなってしまった。自分たちの社会のこと考えると、直感的に思い浮かぶのは国民国家の範囲だったりする。その社会というものの原型的なイメージになっているのは、やっぱりネイションなんですよね。

教科書的なことを言うと、たとえばゲマインシャフトからゲゼルシャフトへという構造があるじゃない。見田先生の『現代社会の存立構造』での議論も、大きく見れば、ゲマインシャフト的な人間関係とゲゼルシャフト的な人間関係というのが、最初のものさしになっている。その場合、大雑把に言うと、近代化とはドミナントな社会関係がゲマインシャフト的なものからゲゼルシャフト的なものへとなる。

そのうえで、ネイションとは何かというのがはっきりしないところがあるわけです。というのは、ネイションというのは明らかに近代的な現象ですよね。ゲゼルシャフト的な社会の中でしか生まれてこない。だけど、ネイションという共同性を考えるときに、僕らは幻想の同胞というか、大きな家族みたいなイメージを持つ。つまりネイションは全体として見たときにはゲマインシャフトの大きいものというイメージになる。

しかし、実際にネイションというものが社会的な実在性を持つのは、十分にゲゼルシャフト化した社会にしか起きないわけですよね。全体として見ればゲマインシャフトに見えるのに、個々の人間関係は全部ゲゼルシャフトになっている。社会学の基本図式の中で位置づけが悪い。個人主義とナショナリズムというのは、近代化のミクロとマクロの両面における最も重要な顕著な現象です。ゲマインシャフトからゲゼルシャフトという図式だと、個人主義は比較的視野に入っているんですけど、ナショナリズムは視野から外れている感じがある。ナショナリズムという現象が何であるかということがはっきり見えないと、近代が見えにくいということがあった。それでナショナリズム研究ということをやっていくと、当時ちょうど冷戦の終わりかけの頃で、エスニシティみたいなものが現代的な現象として前面に出てくる頃だった。研究として面白くなって、どんどんやっていったという感じですね。

――そうすると『行為の代数学』や『身体の比較社会学』とは独立した形でナショナリズムの研究があるということでしょうか。

大澤　『身体の比較社会学』は、近現代社会までをも含むような社会の全体の論理を展開しようと思っていたので、実は未完なんですよ。『ナショナリズムの由来』を出したときに、東浩紀さんには「これは『身体の比較社会学』の第 3 巻として出したと考えていいんじゃないですか」みたいなことを言われたことがありますけど、ある意味ではそういうところもあって、『身体の比較社会学』で本当は書くべきだったことのある部分が、『ナショナリズムの由来』の中に入っているという感じはありますね。

――社会批評と『行為の代数学』や『身体の比較社会学』のような理論研究にはどのようなつながりがあるのでしょうか。

大澤　それは自分の中ではそんなに区別しているわけではありません。社会学は現在のわれわれがどこにいるのかを最も明晰に捉えるにはどうしたらいいのかみたいなことから来ているので、今起きていることに対してある種のレスポンスができないといけません。だから重要なことについてはできるだけ言いたいと思います。オウム事件のときなんかとくにそう思いましたけど、オウム事件が起きて、次々と報道されて、ワイドショーみたいなところでもいろいろなことを言って、たとえば、若者がゲームをやりすぎてどうのこうのとか言ったりするわけじゃないですか。そういうものよりも遥かに深くものが見えているんだということを社会学は示さなきゃいけないと思うんですよ。それでなければ、じゃあ何のためにわれわれはウェーバーを読んだり見田先生の本を読んだり、パーソンズについて考えたりしているのか。そのおかげでこういうふうにものを言えるんだということがないと社会学をやっている意味がないぞと思われると思うんですよ。

ただ、社会学を勉強したおかげで社会が深く見えるとは必ずしもならない。社会がある程度深く見えてくると、それをどういう言葉で、どういう概念で表現すればいいかがわかるという感じがします。社会というのは現にみなさん生きているわけですし、生まれてこの方社会について考えたことがなかった人はいないわけじゃないですか。だから、1 人の人間として自分が社会の中でどんなことを感じ思っているのかということがまずベースにある。

そうした感受性みたいなものが、学問的な概念がしっかり使いこなせるようになっていると、自分が感じていることを深く言葉にできるというか、明晰にものを言うことができるという感じになる。だから、みなさんも社会学をこれから教えるときにも、当たり前の説明の中にちょっとおかしいぞ、違和感があるぞということを見つけて、さらに、そのおかしいぞというところを社会学の概念や道具を使って深く説明できると、学生にも社会学をやっていて意味があるなと伝わるんじゃないかな。

――そうすると社会批評も大澤先生が社会を深く見るという理論的な作業に位置づけられるということでしょうか。

大澤　社会を説明しようとすると理論の方にもフィードバックがなされる感じがあるんですよね。たとえば『虚構の時代の果て』を書いたとき評論家の芹沢俊介さんが書評を書いてくださって、芹沢さんが度肝を抜くほど驚いたというふうに書いてくださった。オウムはサリンという毒ガスを使ったわけです。そのサリンという毒ガスを使ったことは誰でも知っている。ただ、僕は彼らの経験とサリンとのつながりについて書いたんですよ。サリンはたまたま武器として使われたのではなくて、彼らの経験、教義との間でシンクロ現象を起こしている。もちろん彼らは意識はしていないけれども、サリンにある種魅惑されている。

どうして僕がそういうふうに分析したのかというと、自分が身体という現象について考えていたということと関係があるんです。普通身体と心を分けるじゃないですか。でも、日本語で言えば、身体と心の中間に、たとえば、気分とか言うときの「気」というのがある。「気」

というのはある意味で精神としての身体なんですよ。だから「気」というのは、心に寄っているようでいて随分と身体化している。空気というのは、僕の言葉で言うと間身体的連鎖なんですけど、僕は身体というのが「気」というものにつながるようなイメージを理論上持っていたんですよ。それがサリンというガスのイメージとつながっていく。だから、自分がオウム事件を考えたときに他の人が思いつかないような、見えていなかったような部分が見えてきたのは、そういう理論的な背景があったからだと思うんですね。

アカデミズムの外の読者に向けて何を伝えるか

大澤　みなさんも論文を書いたり、発表したり、今までもされているだろうし、これからますますすることになると思うんですけれども、どういうところで自分の論文を読んでもらったり、認めてもらったり、どういう読者に向けて書いたりするかということがあると思います。僕自身の感覚だと、社会学というか、とくに人文社会系の学問というのは、学会の人だけにとって意味があるのではダメな気がするんです。

つまり、社会についての関心というのは、この社会の中でよく生きようとするすべての人にとって関心があって、それを学問的な背景を使って洗練させて書くみたいなところがある。最終的には専門に関わらず、知的な関心を持っている人たちに向けて意味があるものを書きたい。実際に自分が読んで感心した論文が『社会学評論』に多くあったかというと、そういうことはあまりない。たとえば見田先生の論文にしても、廣松さんの論文にしても、必ずしも学会誌に書かれているものではない。社会学も基本的には社会の中で生きている人にも意味がある。だからアカデミズムよりは広い読者を念頭に置きながら書いていますね。

社会学というディシプリンを越えて社会を深く考える

大澤　それに関連しますが、1990 年代の後半に見田先生を中心に岩波書店で『現代社会学』という講座を作ったんですね。これは商業的な意味でも非常に成功しました。講座ものとしては、僕が学生になった頃には、東大出版会の『社会学講座』というのがあった。これは社会学という学問の勉強をするのには非常にいい講座だったと思うんですよ。それを通読すれば大学院に合格できることは確実という感じの非常に充実した内容だったんです。東大出版会の社会学講座は日本社会学会のメンバーのような人たちが主に書いているんですね。すべての分野や流派が満遍なくのっているので、非常に素晴らしいと思うんですよ。

ただ、ある時期から、社会学という狭い意味でのディシプリンを越えていろいろな人がいろいろな形で社会について深く考えていて、そうした考え方は社会学的な観点から見ても深いんじゃないかということがあった。社会学の領域を広げるようなイメージでいろいろな人に書いてもらって、いわゆる連字符社会学というのではなくて、テーマ別に分野横断的に書くという方法で作ったのが岩波の現代社会学の講座だったんですね。

だからあれは学会にはポジティブ、ネガティブな波紋を呼んだような気もしますけどね。ディシプリンのアイデンティティにこだわる方にとってみればちょっと不愉快だみたいなこ

とも言われましたけど、あれのおかげで、社会学はいろいろなことができるんだぞと言えた。社会学という学問の持っている自由度とか広がりというものを講座の形にしようとして作ったのが岩波講座でした。

教員時代の知的交流

――東大の助手時代のことについて教えていただければと思います。

大澤　東大助手時代は大学院生のお兄さんみたいな感じなんですよね。さっきも言ったように、大学院に入った瞬間から自分は先生と対等だと考えていたわけです。ところが助手になると、職業上のポジションがあるから、研究室のハイアラーキーの中に位置付けられちゃうじゃない。昨日まで吉田先生と対等なのに助手としては部下として仕えなければいけないので、なんとなく居心地が悪かったところがありますけれども、でも仕事のことは必要なのでしっかりやりました。助手になって思ったのは、自分が大学院生のときは自分の周辺を中心に見ていくんですけど、助手になると大学院生全員と付き合うので、院生全体の悩みみたいなものが見えてきたという感じがしましたね。当時、やっぱり 1 番面倒なことは就職問題でしたからね。今に比べれば全然ましな状態ではあったんですけど。

それに、今はどうなのか知りませんけど、あの頃は先生たち同士が仲悪いじゃないですか。はっきり言って気を遣いましたよ（苦笑）。僕が助手になったのはちょうど高橋先生が退官するのと入れ替えなんです。高橋さんと富永さんはもう信じられないぐらい仲が悪いんですよね……高橋さんは自分の退官記念のパーティーに富永先生を呼ばなかったんですよ。でも富永先生は最後の最後で土壇場で呼ばれて「来てもいい」ということになるんじゃないかと思って、一応その日もちゃんと正装して研究室に来ていらしたんですけど、高橋先生は「俺は本当は富永が嫌いだ」「退官のときぐらいは俺の勝手にさせてくれ」「富永だけは来るな」みたいなことになって大変だったんですよ。僕はそのときちょうど 4 月から助手になることが決まったので、3 月の段階で見習いみたいな形でお手伝いをしていたんですけどね。

みなさんも名前を知っていると思うけど、尾高邦雄という人が高橋先生の先生なのね。尾高さんと、これも有名な農村社会学の福武直さんがパーティーに来るので、私は尾高先生のアテンドをしました。尾高先生はなかなか付き合いにくい人でしたね。それに比べると、福武さんはすごくいい人でしたね。僕はそのパーティーの時に尾高さんのアテンドとしていろいろやったんだけど、尾高さんからは何のお礼も言われませんでした（苦笑）。でもほとんど何もしなかった福武さんからはちゃんとハガキでお礼が来たんですよ。福武さんとはほとんどそのときしか面識がなかったのに、丁寧にこんな若い助手にまでお礼を書く本当にいい人だなと思いました。

富永さんと吉田先生も本当はすごく仲悪いんですよ。学問的な流派としては吉田先生と富永さんは同じグループなんだけどね。先輩に強く言われたのは、研究室で会議するときに誰かの目を見て話してはいけないと言われたの。「誰かの目を見てその先生に訴えているみたいになると、お前は誰かの味方に見えちゃうから、絶対に空間に目を向けていなさい」みたいなことを言われた（苦笑）。めんどくさい時代でしたよ（苦笑）。

――その後、千葉大に移られますね。

大澤　この間早逝された立岩真也さんと、今関西にいる奥村隆さん、早稲田の先生をやっている長谷正人さんと僕はほとんど同じ年なんです。僕が 1 番上ではあるんですけど、一緒にやっていて、今考えてみるとすごくいい時代でした。

東大のとき、僕はものすごく勝手なことをやっているつもりでしたけれども、それでも上からの抑圧をちょっと感じていたかもしれない。千葉大にも自分より年長の先生たちがいるんですけれども、直接の先生ではなかったし、あまり抑圧的な人たちではなかったから、非常に自由にできた。学生の指導面でも、研究面でも、千葉大時代はすごくいい時代だった。

立岩くんは僕より 2 つ年下なんです。見田さんのゼミにいれば大学院に来る前から知り合いになれるので、僕は学部の時から彼のことをよく知っています。

立岩くんはすごく面白かったし、実力もあったし、個性的でもあって、本当はものすごくいい人というか、他人のことを思っている人なんだけど、社交辞令的な媚びへつらいみたいなものが嫌いな人なんですよ。だからよく知らない人から見ると、立岩さんはすごくぶっきらぼうで無礼な人に見えてしまうんですよ。面白くないときには面白いと言わない人なの。

たとえば学生時代の立岩くんはゼミに出てつまらない発表だと聞いてないんだよね。何をやっているかと言うと、当時はタウン情報誌の『ぴあ』という雑誌があって、毎月どこでどんな映画をやっていて、どんなコンサートがあって、どんな芝居があってということが書いてあった。当時はまだ複製技術もしっかりしていないから、映画は映画館に行かないと見られないわけですよ。だから古いけどなかなか見たことがなかった映画がどこで上映されるとか、そういうのがいろいろ載っていて、当時そういうのをみんなが読んで流行のトレンドを追っていたんですよ。それで立岩はゼミの発表がつまらないとその『ぴあ』を見て全部チェックしているんですよ、一生懸命ずっと（笑）。チェックしてもいいけどお前そのときはゼミに出なきゃいいじゃないと思うんだけど（笑）。一応聞いて、つまらないなと思うとそれをやっているんですよ。よく知っていれば、みんな立岩を人間的に愛しているんだけど、知らない人はあれなので、きっと就職に苦労するだろうなという感じがありました。

それで僕が千葉大の助教授になったときに、立岩くんはまだ常勤の仕事がなかったので、ぜひ助手に採用しようと思いました。当時まだ 1 番若い助教授ですから、人事に対して言うのはなかなか難しいところもあったんですけど。ただ、立岩はその段階でずば抜けた業績がありました。じゃあ、「この立岩さんという方を助手にしたらどうですか」と僕が言うと、ほかの先生が「この方は業績がありすぎるんじゃないでしょうか」と言うの。「助手には申し訳ないです」と言うわけ。それで僕は、「それだったら助教授で取っていただいても構わないです、講師でもいいです」と言ったんですよ。僕がそういうことを言うので、ほかの先生たちの反発をくらうんですね。そのときに助けてくれたのが奥村さんなんです。奥村くんは人間ができていて、こう言ったんですよね。「私は去年、この千葉大学に採用していただきました。それは、私の業績を先生方に評価していただいたから喜んでここに来たんです」と。「業績を評価していただいたからここに来られたということがあって、そういう気持ちで来てるわけですから、業績がありすぎて落とすというのはどうでしょうか」みたいなことを言った

んだよね。ほかの先生たちも奥村くんのことを人間的にも高く見ていたので、そう言われればそうですねみたいな感じで立岩くんを取ったんです。

それで立岩くんを取ったらやっぱり素晴らしい。とくに学生たちとの付き合い方が。立岩くんは自分自身の研究に引きつけて障害者の問題みたいなことで社会調査実習をやったんですよね。そしたら学生たちもそれにすごく面白がってついてきた。千葉大学は当時は修士課程までしかなかったから、研究者になる人は少ないんですけれども、立岩が助手をやっているときだけ将来研究者になりたいと思う人が急に出てきて、千葉大を出てからたとえば都立大とか別の大学の博士課程に行くか、あるいは後に千葉大にも博士課程ができましたのでそこを出て、今はどこかの先生をやっているという人が何人かいます。

あの頃は立岩くんがいて長谷さんがいて奥村がいて僕もいて、研究上すごくアクティブな時代を過ごすことができて、今考えてみればいい時代でしたね。

――京都大時代はどうだったのでしょうか。

大澤　京大は人間・環境学研究科という、東大で言えば教養学部の上にできているもので、人間と環境を合わせて要するにすべてあるみたいなところで、それなりにまた楽しかったですね。ただ、京大の学生たちは東大を意識しすぎているなと思ったね。

僕が京大に移ったばかりの頃、1 年間、京大と東大の両方で教えていた時期がある。そのときに僕は 1 つ実験をしてみようと思って、東大と京大で本当に違いがあるのだろうかと、わざと東大と京大で全く同じ講義をしたんですよ。何がわかったかと言うと、全体の上位 2、3 パーセントはどちらもものすごく優秀な人がいるんですね。そういう人は、優、良、可、不可というようなレベルを越えた特別なものというか、才能というか、そういうものが感じられる人です。それは東大でも京大でもあまり変わりなく上位にいるんですけど、問題は中間ゾーンなんですよ。中間ゾーンを見ると、東大の人はできるだけ優を欲しいという感じが明らかなんだよね。80 点狙いなの。京大は可を狙っている、不可じゃなければいいよという感じの人が多いわけ。だから平均点を取ると東大の方がずっといいんですけど、上位だけ見れば同じようなものになります。東大生は進振りがあるからですけどね。非常に点数にガツガツしているんですよね。そんな感じがしましたね。

それはともかくとして、京都は学者にとっては非常にいいところです。コンパクトなのに、研究者密度が非常に良い。同志社と京大なんて、どの学部にいるのかによりますけど、ちょうど歩くのにいいぐらいの距離ですから。

京大は、僕が入ったのは人間・環境学研究科ですけれども、文学部の方に社会学があって、たとえば教育学部だとか人文研とかいろいろなところに社会学者がいるんですよね。その社会学の先生たちどうしの人的交流というか、研究会みたいものがあって、そこで院生同士の交流もできるので、僕の学生たちが文学部のほかの先生のゼミに出たり、向こうからも来たりという感じで、非常に研究者にとってはいいところだったんですね。

やっぱり大学で教えていると、とくに社会学の場合だと、学生から学ぶこともあるじゃないですか。学生たちはこんなことをやっているのかみたいなことだけでも勉強になるじゃない。学生が何かに興味を持っていると知ることは社会学的にも刺激にもなります。大学に勤

めるというのは、面倒なブルシットジョブが多すぎるので、本当に大変ではあるんですけれども、学生と直接交流できることはとてもいいことなので、みなさんにはいろいろ利用してやっていってほしいなとは思うんですけどね。学生が学者になるか社会人になるかさまざまだと思うんですけれども、その人の精神的な成長というか、変化みたいなもの全体に付き合うことができるところが大学の面白いところなので、やっぱり非常勤よりも常勤になったほうがよい。その場合失う時間も多いので大変ではありますけれどもね。

現在の社会学のあり方について——理論と実証の関係

——大澤先生のところにも、いわゆる実証研究、経験的研究を中心に取り組まれる学生が来ていたと思います。大澤先生はどちらかと言えば、理論研究を中心に展開されていると思うのですが、学生にはどのようにご指導されていたのでしょうか。

大澤　僕なんかはよく「理論に傾き過ぎている」と言われたりするんですが、僕自身は本当のことを言うと、理論と実証を分けるのはおかしいと感じているんですよね。理論のない実証は考えてみればあり得ないわけじゃないですか。逆に理論だけでは、畳の上の水練というか、何のためにその理論を磨いているのか。ただたしかにある時期から、理論研究の衰退というのも非常にはっきりしてきましたね。日本だけではなく、世界的に見てもね。

これはそれ自体、社会思想的に、あるいは知識社会学的に興味深い現象ではある。僕が大学院生や若手研究者の時代には、学会に行くと理論関係の分科会がものすごくたくさんあった。学説史も広い意味での理論なので、そういうものを含めるとたくさんあったんです。今はそういう部会がほんの少ししかないような状態になってしまいましたね。これは今の若い人がいけないのではなくて、その前の世代が理論的に説得力のあることをやっていないから後継者が出てこないだけで、自分たちがいけないのかなとも思う。

社会学の理論上のピークに近いところに、ルーマンという人がいますけどね。ただ、ルーマンの研究をしていると、ルーマンについて詳しくなる、ということになってしまうんですよね。ルーマンは非常に抽象的にものを喋りますが、それが現実的にどういう現象に対して深く語っていることになるのか、翻訳する力がみんなにない。ルーマンの頭の中にはあるんでしょうけれど。ルーマンの理論は結局、理論的な継承に繋がっていかなかったですね。

パーソンズもかなり抽象的なんですが、それでも AGIL の A は経済、G は政治といった形で、具体的なものに繋げやすい。ルーマンの場合は、とくに後期になればなるほど——もちろん『社会の経済』とか書いていることは書いているんですけれども——非常に抽象化されてしまって、そこまで抽象化したことのありがたみを把握することがなかなか難しい。先ほども言ったけど、理論的に抽象化して概念を掴んだときに、それがなければわからなかったことがわかる、というレベルで理論を提示できなければいけない。ただ、多くの若い社会学者は納得しなかったんでしょうね。それで理論研究が停滞していくことになるんです。

でも実際には、やはり理論と実証が車の両輪になっていかないと、実証だけ繁栄して社会学が成功するということは絶対にないと思いますね。たとえば、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が実証研究なのか理論研究なのか、と問うこ

と自体が無意味ですよね。あれに意味があるのは、理論的にも深く、実証的にも意味があるからです。両面がないといい研究は非常に難しくなっていくんです。

理論とは何なのか、ものすごくざっくばらんに言うと、「そんなの当たり前じゃん」ということを超えたことを言うことなんですよね。もちろん当たり前のことで本当に話が終わるならそれでいいんですが、大抵の本質的な問題というのはそうではない。僕はよく言うんですが、みんなが言っていることと違うことは間違いが多いかというと、そうではないんです。みんなが言っていることというのは大抵わかりやすい範囲のことを言っているだけですから。みんなが思っていることの大半は間違っていると思った方がいいんです。「みんなはそう思っているかもしれないが、そういう説明では本当のことは見えていないぞ」と。理論のおかげで、ぱっと見て言える事実関係を超えたものが見える、というのでないといけません。実証研究でもそうですよね。当たり前のことが当たり前に実証されるだけではしょうがない。そこに理論が要るんです。

大学院で僕のところに来た人たちも、みんなそれぞれにフィールドがあって実証研究をされていた。ただ彼らを見ていると、理論的な関心を持ちつつ、自然とそういうふうになっていったという感じがします。髙谷幸さんは、大学院に入ったときには見田先生のものをたくさん読んでいて、そのうえで自分の社会学をやるようになった。髙谷さんは学部は法学部だと思うんですが、真木悠介への関心があって、真木に一番近いのは大澤だということで僕のところに来た。いろいろとものを考えていく間に、自然と今の移民研究になっていったという感じですね。だから、理論を捨てて実証になったというよりも、理論的関心のベースに具体的な現象があったというのが適切ですね。

それから、京大で人口問題や子育てのことをやっている柴田悠くんなんかも僕の大学院生です。彼も最初はすごく哲学的でしたね。最初は倫理学みたいなことをやっていて、なかなか優れたことをたくさん言っていたんですよ。でもそういう中でだんだんと「よき社会」というものについての具体的なイメージが生まれ、今の人口問題研究に繋がっていったという感じです。だから僕のところに来た学生は、理論的な関心はもちろんあるんだけれど、抽象的・理論的に関心があるわけではなくて、何かの現象に託して理論的な問題に興味を持っていたから、今の研究になっているという人が多いんです。僕自身が色々知らせるというよりも、見田先生方式ではないですけれど、好きなようにやらせながら、時々アドバイスするという感じでしたね。彼らも「大澤のおかげでこうなったわけじゃない、自分の力で来たんだ」みたいに思っていると思いますけれども（笑）。

社会学全体として見たときに、理論的な関心はゼロで実証研究をするというのは、よくないと思うんですね。そもそも調査をしようとした時に、どうやって調査を設計するのかという点で、理論的な仮説がなければ質問項目も立てられない。理論的な部分との有機的な繋がりがないとまずいと思いますね。

それから、社会調査ができるということだけでは、社会学者としてのアイデンティティはちょっと弱くないですか。今は昔に比べると社会調査というのはいろいろなところでできますよね。ネットのおかげで、データも昔に比べれば割と簡単に手に入る。皆さん、専門社会

調調査士の資格は持っていますか。

――就職のために一応持っています。持っている人の方が多いと思います。なくても就職できる場合もあるんですが、ないよりあった方が間口は広がるだろうと。

大澤　おっしゃるとおりです。ただ、専門社会調査士という資格がなければ社会調査ができないかと言うと、実際はそんなことはないですよね。多くの人はその調査が専門社会調査士によって行われているのかなんて普通は気にしないですから。たとえば新聞なんかの世論調査はいくらでもあって、利用しやすくもなっている。だから、社会調査だけで社会学という学問のアイデンティティとするのはちょっと弱いし、それだけでいい研究をするのはなかなか大変なことだという感じがしますね。

――1980 年から 90 年代は理論研究が盛んな時代だったと思いますが、現在、停滞してしまった変化の理由についてどうお考えですか。

大澤　原理的なことを言えば、学説の研究を何のためにするのかというと、理論を豊かにするためですよね。哲学を考えてみると、哲学史や哲学の学説研究は、それ自体がすでに哲学であるというところがあります。社会学ももちろん、マックス・ウェーバーとか大物の社会学者の学説研究をしていくと、その人自身が社会を研究しているわけだから、それだけで社会が深く見えてくるということはあります。ただ基本は、学説研究は社会を深く見るための 1 つの手がかりなんですよね。ただ、たとえばルーマンがまだ生きていたときには、ルーマンが何を言っているかを追いかけるだけでも研究になっていたんです。ルーマンが死んでしまえば、ルーマンの言っていることを追いかけただけでは、ルーマンについて詳しくなるだけで、社会学の研究にはならない、ということになる。

ある意味で世界的なトレンドですが、社会学に限らず思想全体として見ても、20 世紀が終わって 21 世紀になってから、われわれの世界観全体を揺るがすような哲学がないんですね。たとえばサルトルの哲学は、1 つの世界観全体を刷新していくものでしたが、そういうタイプの哲学が今あまりないじゃないですか。それと多分同じことが社会学についても言えると思うんです。人間世界に対するある種のトータリティ、そういうものを捉える視野を、現代社会というか、現代の人類が多分失いかけているんですよね。しかし社会学の理論には、社会の全体性を捉える視野が必要です。たとえば人間の行為をどう理論化するか考えた時に、背景となる人間観や世界観の全体がある程度ないと、実はなかなか難しい。一番原理的なことを言うなら、そのことが理論的な停滞に繋がっていると思いますね。

ただ、もう少しプラクティカルな面で言うと、やはり理論研究というのは、なかなか大変なところがあるんです。時間をかけてやっているうちに自然と結果が出るようなものではないですよね。3 年間努力したら 3 年分の結果が出るというものではない。逆に時間をかけず一瞬のうちにできてしまうこともある。一定の業績を積んで就職するというプロセスを考えると、理論研究に人生の中心を賭けた場合は、かなりリスクが大きいということもあるんですよね。今は博士論文に大体平均何年ぐらいかけているんですか。

――今はなるべく 3 年で出すようにと言われていますが、実際は 4、5 年くらいですね。

大澤　論文は、まずテーマが非常に重要ですよね。1 ヶ月でできる研究では、博士論文にならないんですよ。でも 10 年以上かかる研究も博士論文にならないんですよね。だから 3 年から 5 年くらいの研究テーマを選ばなければいけない。だからプラクティカルな要請がかかってきてしまうんですよね。理論研究は、たとえば着想があって、それを理論的に表現するまでに結構時間かかる場合があるんです。だから博士論文向きではないという問題もあって、今の教育システムというか学位取得システムが、理論研究にやや不利な形になってしまっているんですね。でもだからこそ、逆にエンカレッジしなければいけないと思います。そのためには理論研究のありがたみを納得させなくてはいけないんですが。

研究というのは、とにかく研究すること自体が面白くなければいけない。説明すべき社会現象――たとえばオウム事件なんかも含めて――それ自体は悲惨な出来事だったりするわけですが、悲惨な出来事だからといって研究に対しても悲惨な気持ちになっていては、研究できないんですね。たとえば「自分はナチスのホロコーストの研究をしている」という人は、これ以上に悲劇的なことはないわけですが、その研究としてはある意味楽しいということがないといけないですね。実証研究にしても理論研究にしてもその楽しさが絶対的に必要で、理論研究をするには理論で楽しいと思えないといけない。

理論研究が楽しいという経験は若いうちにしておかないといけない。なかなか年を取ってからできません。昔よく「若いうちは実証的研究をして、年を取ってから理論研究をすればいい」と言う人がいましたが、それは合っていません。むしろ理論研究はやや若向きです。40 歳ぐらいまでが一番いいと思いますね。だから大学院生のうちに少しやっておくのがいいと思います。先生たちが今どんなふうに指導されているのかよくわかりませんけれども、先生として見れば、皆さんに早く学位を取っていいところに就職してほしいということもあるので、どうしてもプラクティカルな面での指導もしてしまうんですよね。でも先生の言うことを素直に聞いていればいい研究者になれるわけでもないですからね。偉大な研究者の研究人生を聞くと大体そうじゃないですか。指導された通りにやっていなかった人が成功しているみたいなところがありますからね（笑）。

年をとればとるほど、やらなければいけないことはあまりにもたくさんありますが、自分の人生は短いということも感じるようになります。いかに効率的にどんな学習をするか、ということも結構重要になってきます。これも調べておいた方がいいとか、あれも知っていた方がいいとか、そういうものを全部やっている時間はないわけだから、いかに短期間でやるか。だから短期間にものができるようになるための習得は、若いうちに色々やっておくことが重要ですね。僕なんか今仕事をしていて、たとえば時事的なことを書くときでも、哲学的なものが役立つことは結構あるわけです。ベンヤミンが言っていることとか、ヘーゲルが言っていることとかね。でも年を取ってからベンヤミンを読もうとしても無理なんですよ。20 代のときにベンヤミンを読もうとし、難しくてよくわからないと思ったとしても、そういうものを読もうとする、ある程度その段階で把握する能力をつけておくと、年を取ってから、別の哲学的なものも読めるようになる。でも 40 を超えてから初めて読もうとしてももう遅

いんです。１度でも若いうちにそういうことをやっておけばできます。ルーマンなんて読んでもわからないわけですけれども、ある程度のところまで読もうとした努力があれば、年を取ってから読んだときに理解できるようになる。将来的な吸収能力、色々なものを学習する能力をつけるためには、今のうちに素養というか、ベースを作っておくのが一番重要ですね。

『ソシオロゴス』のあり方について

――『ソシオロゴス』という雑誌の今後のあり方について、ご意見をいただけますか。

大澤　僕が『ソシオロゴス』という雑誌について思うのはこうです。先ほど言ったように、僕が大学院生だった当時、学生たちどうしで切磋琢磨しながらやっていたように、学生さんどうしでお互いを評価するということがすごく重要だと。つまり先生から与えられる評価、あるいは学会のエスタブリッシュメントから評価されていることとは独立に――もちろんそれと一致してもいいし、違っていてもいいんですけれども――、若手の研究者たちがどういうものを良きものとして見ていて、どういうものをプロモートしようとしているのかが見えるようにすること。若い人たちからの研究の見え方というのがすごく重要です。上の世代が見て、「俺はあいつの研究はつまらないと思っていたが、若い人たちは高く評価しているらしいぞ」となったときに、むしろ上の世代がそれに影響されるんですよね。そういう雑誌であってほしいと思うんです。

それは皆さんにとっても有利です。つまり、たとえば皆さんが博士論文を書いて、自分はいい論文だと思う、仲間もいいと言ってくれているが、先生は面白いと思ってくれない、というようなときに、学生どうしの間で高い評価を得られていれば、先生たちははっきり言ってそれにかなり影響されます。若い人たちの勢いは、年配の先生たちにとって本当は脅威なんです。そう思えるぐらいの雑誌にしていくというのが重要だと思いますね。

さっきも言ったように、『ソシオロゴス』は昔――今はどうかわかりませんが――編集者が若手の面白いライターを発見するための鉱脈のようなものだったわけですね。ですから、そういうものとして今後も続けられればいいなと思いますね。

――最後に『ソシオロゴス』の読者に向けて一言いただけますでしょうか。

大澤　やはり志を高く持ってほしいというのが一番ですね。もちろん皆さんはこれから就職して、その中でそれなりに自分をプロモートしていかなくてはいけないですから、それは大事です。ただ社会学という学問がそもそも何のためにあるかを考えると、学者の間で何かについて了解し合うというだけでは、何のためにあるかわかりませんから。最終的には志高いところにあるんだということを思いながらやっていくのがいいと思います。

研究というのは、適度な孤立と適度なディスカッションです。誰かの言うことに 100 パーセント左右されてしまうのは研究ではありません。「あいつはこう言うけど俺はこうだ」ということがなければ研究にならない。オリジナリティの高い仕事というのは、あまりにトレンドを追いかけてしまうとできないですからね。そういう意味で孤立が必要です。しかし完全な孤立からは絶対に新しいものは出てこない。ディスカッションと孤立の最適バランスみた

いなものがとくに若いうちは大事です。僕の若い頃も、たとえば橋爪さんとか宮台さんと議論した時間はものすごい量があって、彼らと議論している間に、彼らを納得させなくてはいけないということの中で、自分の議論が明晰になってくというプロセスが一番大きかったですね。それは先生たちが与えてくれるよりももっと大きいものなので、そういうことをやる場として、『ソシオロゴス』を活用していくのがいいんじゃないかと思いますね。

付記

突然のお願いにもかかわらず、インタビューへの協力をご快諾いただいた大澤真幸先生に改めて感謝の意を申し上げます。また、大澤真幸先生をご紹介いただいた大澤絢子さん（東北大学）にも心よりお礼申し上げます。

(文章：宮部峻／編集・聞き手：馬渡玲欧・松崎匠・中村拓人・宮部峻)

大澤真幸先生略歴

1958　長野県松本市生まれ
1977　長野県立松本深志高等学校卒業
1981　東京大学文学部第Ⅳ類社会学専修課程卒業
1983　東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
1987　東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得修了
1987　東京大学文学部助手
1990　『行為の代数学』で社会学博士（東京大学）
1990　千葉大学文学部講師
1992　千葉大学文学部助教授
1998　京都大学大学院人間・環境学研究科助教授
2007　京都大学大学院人間・環境学研究科教授（～2009 年）
2010　月刊個人思想誌『大澤真幸 THINKING「O」』主宰
（～現在に至る）

〈主要業績〉

1983　「正統性問題をめぐって」『ソシオロゴス』7
1985　「言語行為論をどう評価するか」『ソシオロゴス』9
1986　「〈日本〉」『ソシオロゴス』10
1987　「交換に伴う権力・交換を支える権力」『ソシオロゴス』11
1988　『行為の代数学――スペンサー＝ブラウンから社会システム論へ』（青土社）
1990　『身体の比較社会学Ⅰ』（勁草書房）
1992　『身体の比較社会学Ⅱ』（勁草書房）
1994　『意味と他者性』（勁草書房）
1995　『電子メディア論――身体のメディア的変容』（新曜社）
1996　『虚構の時代の果て――オウムと世界最終戦争』（筑摩書房）
1996　『性愛と資本主義』（青土社）
1998　『恋愛の不可能性について』（春秋社）
2007　『ナショナリズムの由来』（講談社）
2008　『不可能性の時代』（岩波書店）
2010　『量子の社会哲学――革命は過去を救うと猫が言う』（講談社）
2011　『ふしぎなキリスト教』（講談社，橋爪大三郎氏と共著）
2015　『自由という牢獄――責任・公共性・資本主義』（岩波書店）